

跡見学園女子大学学芸員課程平成 24 年度学芸員課程について

村田 宏（跡見学園女子大学学芸員課程主任教授）

本学は、平成 24 年度の博物館実習の概要はつぎの通りである。

本学の博物館実習は、

- ①春学期における、通常授業時の基礎実習（計 15 回）、一日の行程で実施する見学実習
- ②夏期休暇（8 月～9 月）期間中を主体とする学外の博物館・美術館等での学外実習
- ③秋学期における学外実習事後指導、および花簾記念資料館を使用した事後実習

の三種類からなっている。

■ 年度当初の見学実習は、東京藝術大学大学美術館（台東区上野）で行われた。通常は参観することのない「バックヤード」を目にし、美術館建設に携わった先生の話のを伺えたことは、課程履修生にとってはきわめて意義深いことであった。

履修者から提出された三編の「見学リポート」を記しておく。

「東京藝術大学大学美術館を見学して」

W. W.

東京藝術大学の芸術資料収集は、明治 20 年（1887）の東京美術大学設置に先立つ時期から行われてきた。現在の収蔵は2万 8000 件余りに達している。これら芸術資料は、文庫と呼ばれた図書館内に収められてきた。昭和 24 年（1949）には東京美術大学と東京音楽学校が統合され、現在の東京藝術大学が設置された。その後も収蔵品は付属図書館が管理。音楽資料を加え、美術・音楽両学部の利用機関として、資料の研究・保存・公開のための活動を継続した。しかし、所蔵品の増加に伴い収蔵庫が狭隘になった。また老朽化した施設の改善やコレクションの規模に見合った十分な展示空間への要望が学内外から高まったことから、平成 8 年（1996）に美術館新館が着工されるに至った。そして平成 10 年（1998）2 年の月日を経て、美術館としての活動を発展させるべく、これまでの組織の拡充を行い、芸術資料館から大学美術館へと新しくなった。美術館建設のアドバイザーとなったのは、今回案内して下さった、薩摩雅登先生である。説明を受けると薩摩先生の“美術館の理想”を限り無く体现したのがこの美術館であると感じた。案内していただいた場所の中から 2 か所を主に取り上げて、見学の印象、感想を記す。

まず東京藝術大学大学美術館本館は、収蔵庫、展示室、研究管理部門の 3 つに大きく分けることができる。さらに学生食堂（カフェテリア）、ミュージアムショップ、画材店なども入っている。展示室は大きく 2 か所に分けられている。地下には常設展示を主とした大型のガラスケース付きの展示室があり、隣接して設けられた展示室は多様に対応することができるように可能な限り細部を消去した白い箱型展示室になっている。また、地上 3 階にはトップライト方式の展示室がある。

今回見ることができたのは先にも述べた地上 3 階にある展示室 4 である。ここは最上部ということもあり、自然光が差し込むレイアウトになっている。トップライトは移動可能で、光が綺麗に表現出来るという ERCO のライトを使用している。照明の電球部分は細かい振動に弱いため極力振動を与えない。また、電気代や取り換え代などを考えると照明には調光をかけ 60％ほどに絞り長期に渡り使えるようにする。壁は先に述べたように白く、部屋の形は真四角ではなく入口から入って対角の壁が山折りカーブを描いたデザインとなっていた。床材は白木を使用。展示室 4 は現代美術向けの展示を想定しており、展示室も現

代美術と調和がとれるものであった。自然光が入る窓は 5 層になっており、90％紫外線をカットしてくれる。部屋に設置してあるスライディングボードは壁としての存在感を出すために幅を 40cm 持たせていた。この部屋は床にコンセントを極力減らす仕組みとして、このスライディングボードにコンセントを付けている。

次に、地下 3 階部分は収蔵庫 3 と 4 とその前室、資料調査室が設置してある。エックス線がとれる場所もあり、資料を詳しく調べることもできる。また廊下は広く作ってあり倉庫のように使用していた。照明はつり下げて保管していた。収蔵庫に入るには入口に換取りの青いシートがあり靴からスリッパに履き替えた。ロック式の分厚い大きなドアの奥には前室があり、それを挟んで収蔵庫 3 ・ 4 が設置してある。収蔵庫内では作業が出来ないため、前室で梱包などの作業を行う。収蔵庫のドアには子窓が付いておりわざわざロックをあげなくても中の様子が分かるような仕組みになっていた。収蔵庫のドアはダブルロックで電子とダイヤルである。もし火災が発生した場合は窒素を使用する。ハロンガスの場合、一気に空気を冷やすので結露が発生、結局資料が濡れてしまう。展示室では、資料に化学薬品が付くよりも水が付いたほうが修繕しやすいという観点から、初期消火に使用する消火器に一般の消火剤ではなく水が入っている。

最後に、美術館の建築アドバイザーが現場の人であったことが、細かいところへの使いやすさや工夫に繋がっていると感じた。総工費に十分な費用があったということで内部、外観共に豪華であった。搬入口が一階にあることも、美術館博物館には珍しいことで、これには強いこだわりを感じた。資料の移動の際はなるべく振動など資料に負担をかけないようにしているが、一般的に美術館や博物館の搬入口は地下にある。それまで極力負担をかけない様にしていても最後に急な坂があっては意味がないという観点から、一般的に地下の搬入口を 1 階にしたそうである。このことから言えるが、細部に資料への配慮や見せ方、使用する側の使いやすさがよく考えられていると感心した。また、どのようにして美術館が出来るのか、どこに配慮するのか“来館者”という立場からでは知ることのできない細部や作る側の想いまで知ることが出来たのは大変勉強になった。

「東京藝術大学大学美術館を見学して」

A. K.

東京藝術大学大学美術館の設計にも携わった薩摩先生に解説していただきながら館内を見学することができた。薩摩先生の解説はととても丁寧で分かりやすく、且つ大変に面白かった。勉強不足のため他の美術館や博物館の裏側を見たことがなく、他館と比較する知識を持ち合わせていないが、この美術館の館内には先生の経験を活かした設備が多く様々なこだわりで溢れており、学生のことや収蔵品のことを一番に考えていることが伝わってきた。最も驚いたのは薩摩先生の奇抜なアイデアとそれを実行に移す行動力であった。幾つかの具体例を挙げて興味を持った点を記していきたい。

- まず、学生が作品を展覧することを考え天井を 5メートルにし、学生が安全に実践的な活動ができるよう配慮されていた。このような配慮は収蔵庫内にもみられ、通常は網戸になっている部分を木製の引き戸にし、一部にガラスをはめ込むことにより外から中の様子を観察できるようになっていた。
- 搬入口が一階に設けられていること。一般的には搬入口は地下に設けられているため急な坂道やカーブがあることが多く、それらにより美術品を傷つけてしまう恐れがあったが、一階に搬入口を設けることにより、より安全に美術品を搬入できるようになっていた。館内では台車が通りやすくするために段差をつくらないよう配慮されており、美術品を傷つけずに運ぶことの重要さがつよく感じられた。

3. 収蔵庫の全ての扉が漆で化粧を施されていたこと。鉄の扉では重々しく寒々しい感じがするが、漆で化粧を施すことにより空間が華やいでいた。人の目に触れないところにも工夫が凝らされていて感動した。

4. 照明器具を取り付ける前に明かりが灯るか確認できる照明器具専用の台車を作製したこと。この台車を作製したことにより無駄な動きをする必要がなく効率的に作業が進められるようになり、作業時間が短時間で済むように工夫されていた。また、自然光が入る展示室と入らない二つの対になる展示室やドイツのエルコ社の照明を使用するなど照明へのこだわりが伝わり、展示をするうえで照明がいかに重要かを学んだ。

5. 収蔵庫の入り口付近に側溝があったこと。これは火災があった際に消火時の水が収蔵庫内に入らないようにするためのものであった。このような災害時の設備のお話や東日本大震災の時に収蔵品に被

害が無かった話を聞き、図書館や博物館、美術館などを建設するには災害などの影響をできる限り受けけない場所にたてることや万が一のことを考えて設備を整えておくこと、緊急マニュアルなどの作製をすることが大切で奉ることを改めて認識することができた。

その他にも、スライドボードが日本独自のものであり、壁としての存在感を持たせる場合は厚くつくり、収蔵品の作業を行う部屋では展示室と同じ壁の色にすることによって展示室で撮った写真と同じ写真を撮ることができ、そのため、どのように展示をすればいいのイメージを膨らませることができることや木材を使った床には色を塗らないほうが自然で汚れや傷が目立たないなど実用的でコストを削減する方法、美術品の多くがカラフルな木箱で梱包されている理由など普段は聞くことのできないお話を聞くことができ、様々な設備を見学することができとても勉強になった。このような体験は滅多にできることではないと思うので学んだことを忘れず、今後の博物館実習に役立てたいと思う。

「東京藝術大学大学美術館を見学して」

M. S.

私が一番素直に感心した点は、この美術館が保存と展示を目的に単純に造られたのではなく、扉一枚、床一枚と非常に細部にまでこだわって考え、造り込まれているところである。私は、学芸員は建築のことはわからないのだから建設時の設計などから立ち会うことはないと思っていたが思い違いをしていたようだ。むしろ、新たな美術館を造るからこそ建設時の設計の段階から立ち会う必要があるのだと感じた。

展示室は、自然光の取り入れ、照明の種類、壁、床なども一つ一つ考えて作られているようだ。自然光では一部屋に光が入るところと入らないところを、作品の特性に対応できるようにと敢えて作ったとのこと。それを照明と可動式の壁が支えている。可動式の壁は他の博物館でも展示場所を増やす目的やある理由でその展示物を（平たくいうと）隠す必要があるため、それを迅速に行えるようにという目的で用いているのを見たことがあるが、これは外国にはない日本独特のものだそうで、これは素直に驚いた。当館の可動式の壁は動線を変えるためなど多目的に使えるようにとの導入らしい。壁自体の工夫でいうと、この可動式の壁は可動式に見えないよう、しっかりとした壁に見えるよう敢えて壁を分厚くしてある。更に、元々の壁と統一感を持たせるために同じ色を使用している。また、実際の中身の材質はわからないが、見た目も同じであり、可動式といえどもまるで普通の壁のようである。この普通の壁に見せる工夫こそがしっかりとした動線を示す役割を担っている。

床は白木だそうで、特に床に関しての特別な手入れをしなくてもいいようにとのことである。使っていれば自然と汚れたり傷ついたりしてしまうが、木目なので全体が同じように汚れたり傷ついたりすれば自然に見え、気にならなくなる。その性質を捉えた上での白木だそうだ。もしこの床が白色であれば、汚れや傷が目立ち、その都度大掛かりな手入れが必要となるだろう。ましてや傷であればすぐにはどうこう出来るものではない。そういった床に構う無駄を省いたのが白木である。確かに真っ白でないので神経質に床を気にすることなく、作品にその神経を集中させることが出来るので作品のためにもこの床は白木で正解であったといえる。

このように展示室は、壁や床などでも一つ一つが確かな目的と理由を持って考え、選び抜かれて出来上がっていることがわかる。

収蔵室では特に収蔵庫の前室の工夫が目に入った。収蔵庫の前室の中、扉のすぐ目の前の足元には何故かベタベタするシールのようなものが設えてあった。これは、収蔵品を運ぶ際に使用する台車などのホコリをここで落とすためだそうだ。シールがホコリを取れなくなったら、それを剥がせばまた新しいシールが顔を出し、また同じようにホコリを取ることが出来る仕組みだという。このように、実際に使ってみなければ気付かないような些細なことにも気付き、事前に対策をしていることから、美術館完成前からの細やかな計画性を感じることが出来る。

当館はより効率良く機能的に収蔵物を振管・展示することを目的に設計段階からかなり入念に考え、造り込まれていることがわかった。ここでは紹介しなかったが、空間の使い方や収蔵品を運ぶ際の段差、台車の一つでさえも、よく考えて造られていることがわかった。どうしてその材質を選んだのか、どうしてこのような空間を作ったのか、素人目ではわからないようなことを細かく説明してもらったことにより、その一つ一つに意味があり、必要な役割をそれぞれが持っていることがわかった。学芸員は収蔵品自体の保管や展示を考えていけばいいと思っていたが、収蔵品を保管・展示する「場所」にも気を配らなければならないのだと今回のことで感じた。収蔵品に対してどれだけ広く気を遣える視野を持てるかが今回の私の学びのポイントであった。



東京藝術大学大学美術館

各館の方々にはひとかたならぬご指導とご便宜を賜った。あらためて厚く御礼申し上げたい。

■ 秋学期は、夏季の学外実習での体験をもとに、花蹊記念資料館での模擬展示（1月～2月）のための企画立案を進めることになる。民俗・歴史、美術の専攻に分かれた二グループが、展覧会の内容を検討する作業は、毎年のことながら、卒業論文執筆の時期と重なり、多くの労苦を強いられことになったが、ぎりぎりの限界まで完成度を追求した履修生の情熱と努力にねぎらいの言葉を贈りたい。

当日、懇切丁寧な解説と案内を賜った東京藝術大学美術館の薩摩雅登先生に心より御礼申し上げます。

■ 春学期の基礎実習は、美術資料、民俗資料の取り扱い、写真撮影の基本を中心に行われた（専任教員1名、兼任講師2名）。必要な基礎的修練は相応に果たし得たと考えている。

■ 夏季の学外実習は、以下の12館で行われた。

上野の森美術館 江東区中川船番所資料館 渋谷区立松濤美術館 石神井公園ふるさと文化館 損保ジャパン東郷青児美術館 高崎市歴史民俗資料館 千葉市立郷土博物館 東京都江戸東京博物館 東玉人形の博物館 練馬区立美術館 野球体育博物館 山梨県立博物館



博物館実習自主企画展示

会 期 平成 25 年 1 月 22 日 (火) ～ 2 月 4 日 (月)
 会 場 跡見学園女子大学花蹊記念資料館
 開催時間 9:30 ～ 16:30 (日曜は休館)
 入 館 者 145 名

① 「体を温める、冬の生活」

第一展示室

担当学生名

久保田 亜美 佐久間 瑞綺 鈴木 舞
 高橋 美紀子 松本 恵里菜 銘苅 穂菜美
 茂木 綾香 渡邊 わこ 和田 奈津子



展示趣旨

寒い冬の季節、この寒さからどうやって身を守り、如何に快適に過ごすか、それは今も昔も変わらず私たちの関心事となっています。

現在ではエアコンや電気ストーブなどの暖房器具を中心に、電気を使って暖をとるのが当たり前となっています。

それでは、まだ電気を使う暖房器具が主流ではなかった昭和期にはどうやって暖をとり、どうやって冬を過ごしてきたのでしょうか。炭や石油を中心とした火鉢などの暖房器具、カイロなどの暖房用品、半纏などの分厚い着物、鍋や酒といった体の内から温める食べ物など、人々の生活の根幹である家屋でなくモノを用いて工夫することによって人々は冬を過ごしてきました。

本展では、昭和期の人々が寒い冬を何を用いて過ごしてきたか、昭和期に囲炉裏の代わりに用いられるようになった炬燵を中心に当時の暮らしを一部再現しました。再現展示に展示することが出来なかったものは暖房器具、暖房用品、衣服、食にまとめて紹介しています。

また、企画展示として暖簾をテーマに展示をしています。何故ここで「暖簾」が展示されているのかを是非考えてみてください。



② 「東西交龍 ～(時間を超越した龍と人間のあり方)～」 第二展示室

担当学生名

郷田晶子 高柳沙羅 野内さとり 諸橋絵美



展示趣旨

「東西交龍～(時間を超越した龍と人間のあり方)～」展は、古来より描き続けられてきた龍をテーマに取り上げ、文明の誕生とともに出現した龍という架空の生物が、時空や文化を越え、どのように表現されてきたかを辿る展覧会です。

龍の歴史は古代メソポタミアのティグリス・ユーフラテス川流域に居住していたシュメールの人々から始まります。大河や水と深い関わりを持つ龍は強大な力の象徴として表され、のちに周辺のエジプト、ギリシア世界に広まりました。そしてキリスト教文化の中で龍は、聖書の物語に基づき邪悪さの象徴として頻りに描かれ始めます。キリスト教の聖人伝説をまとめた『黄金伝説』(13世紀)の「聖ゲオルギウスの竜退治」と、ヨハネ黙示録の竜退治の場面である「大天使ミカエルの竜退治」は中世以降、キリスト教絵画の重要なモチーフとなりました。芸術と宗教の関係が薄れた近代にあつては、龍退治のモチーフは象徴主義の画家達の観念や思想を反映する主題としてふたたび甦ります。

一方、古代中国に生まれた東洋の龍は「神獣」、「靈獣」として扱われ、王朝や皇帝のシンボルとして崇高な存在と見なされてきました。中国・朝鮮の稲作文化と共に蛇に似た形態の龍が伝来した弥生時代の日本では、龍を水の神、雨乞いの神として信仰の対象とし、土器や青銅器、壁画などに多く描かれています。日本の龍の形が確立する中世を過ぎると、襖や屏風、天井絵に描く狩野派や個人で活動した絵師などによる近世の龍が登場します。写実に長け、より本物らしい表現を追求した円山応挙と、想像力豊かで、強烈な個性を持つ絵を描いた曾我蕭白という、同時期に活躍した異色の絵師による龍の姿をご覧ください。

東西の龍の歴史を辿った本展では、文明の誕生と共に出現した古代の龍から始まり、西洋の伝統的な作品や近世日本の親しみ深い龍、現代に生きる龍など、さまざまな龍の形をご紹介します。数千年の昔から人類の誕生と発展の歴史と共に変化を遂げてきた龍は、人間の中に眠る始原の記憶を具現化した形象であり、紛れもなく人間の創造物と言えます。それは、この先も社会の発展と共に人間と密接に関わった存在として生き続けることでしょう。